

児童生徒に対する日本語教育のカリキュラムに関する国際的研究

平成7年度調査研究中間報告

《教師の日本語教育に対する意識調査》

平成9年9月

国立国語研究所

15

2

37914

## まえがき

近年、グローバルな人の動きの活発化にともなって、海外に在住する日本人の数が増加し、滞在年数も長期にわたる傾向にある。その結果、海外在住の日本人児童生徒が増加している。海外駐在地生まれの児童生徒、あるいは長期滞在の児童生徒のなかには、日本語の運用能力が不十分な者も少なくないのが現状である。

一方、諸外国の初等・中等教育において、外国語として日本語を学習する児童生徒が急増している。また国内においては、日本語非母語話者で日本の小中学校に在籍する児童生徒が増加している。海外での外国語としての日本語学習は、年少者に対する言語教育一般の問題として、日本語運用能力の獲得以外の学習目標についても十分考慮する必要がある。国内の非母語話者に対する日本語教育においても、認知能力の発達、学校生活への適応など、日本語習得に関連して考えるべき要因が非常に多い。

このような状況下の中で、児童生徒に対する日本語教育の総合的研究の必要性もまた高まっているというべきであろう。国立国語研究所では、平成7年度から5カ年計画で、研究課題「児童生徒に対する日本語教育のカリキュラムに関する国際的研究」に着手した。この研究は、児童生徒の言語教育環境を彼ら自身、彼らを取り巻く人的・社会的環境などを複合的に調査し、彼らに対する日本語教育のカリキュラムに関与する諸条件を特定すると共に、望ましいカリキュラムのあり方を探索することを目標にしている。

第一年次には、日本全国の小中学校の先生方に対して、言語教育観と教育設計の関係についてアンケート調査を行った。質問は、言語教育に関して考えていること、および実際に児童生徒に接する際の留意点について7段階で自己点検する形式を採った。本報告は、集計結果の第一次分析の概要をまとめたものである。

今後は、第二次分析の結果をまとめる作業を続行して、報告する予定である。また、平成9年度から10年度にかけて、国内で日本語を第二言語として学習する児童生徒の保護者に対するアンケート調査、および児童生徒の言語運用能力の総合的査定を実施する。

この冊子が各方面の関心に応えるものであることを希望している。

研究担当者

国立国語研究所日本語教育センター

日本語教育指導普及部

石井 恵理子

西原 鈴子

## ■ 目次

1. 調査の目的	1
2. 調査項目	1
3. 調査対象・方法等	1
4. 有効票数	3
5. 日本語教育に関する調査－質問票Ⅰ，質問票Ⅱ	5
6. 集計結果（単純集計）	15

図表1. フェイスシート（教師，父母，年少者当人，学校，地域の属性等）

図表2. 設問群1（意思決定），設問群2（言語教育観）の各質問の評定平均値降順（総数）

図表3. 設問群1（意思決定），設問群2（言語教育観）の各質問の評定値等の回答分布

## ■ 調査分析報告者

岡崎 敏雄 筑波大学文芸・言語系

酒井 均 (株)社会工学研究所

常見 佳代 (株)社会工学研究所

## 1. 調査の目的

児童生徒の日本語教育のカリキュラムの構築に向けて、日本国内で日本語を学習する外国人年少者<sup>1)</sup>の学習環境として、特に日本語教育にかかわる教師<sup>2)</sup>の属性、経験、言語教育観及び意思決定を調べるとともに、それらの関係を明らかにすることを目的とする。

注1) 当調査では、以下のイ及びロの子どもを「外国人年少者」とし、外国籍児童生徒、あるいは、文部省調査における日本語教育が必要な外国人児童生徒という捉え方をしていない。

イ. 両親とも日本語を母語としない

ロ. 片親が日本語を母語としない

ハ. 両親とも日本語を母語とする、または母語話者に近い

注2) 外国人年少者の日本語教育にかかわる教師とは、外国人年少者の日本語指導を行う日本語担任、時間講師、及び外国人年少者の在籍学級の担任のすべてとする。

## 2. 調査項目

- (1) 外国人年少者の日本語教育にかかわる教師は、どのような言語教育観を持っているか。
- (2) 外国人年少者の日本語教育にかかわる教師は、どのような意思決定を行っているか。
- (3) 外国人年少者の日本語教育にかかわる教師の言語教育観と意思決定との間には、どのような関係があるか。
- (4) 教師、父母、年少者本人、学校、地域の属性等の違いによる言語教育観、意思決定の違いは何か（＝言語教育観・意思決定観の違いに影響する要因は何か）

質問票には設問群1と設問群2を用意し、設問群1では意思決定を図る質問項目を53問、設問群2では言語教育観を図る質問項目を24問設置した。

また教師の属性や経験、学校や地域の取組、父母及び外国人年少者の属性等を把握するための質問をフェイスシートとして設置した。

## 3. 調査対象・方法等

〔調査対象〕

外国人年少者の日本語教育にかかわる教師

〔調査期間〕

平成8年1月中旬～2月中旬

〔抽出法等〕

国内における外国人年少者の数、及びその日本語教育にかかわる教師の母集団の数を掴めないため、日本語教育が必要な外国人児童生徒（平成7年度9月文部省調査）が就学する公立の全小・中学校における、外国人年少者の日本語教育にかかわる教師すべてを対象とすることにした<sup>3)</sup>。

注3) 平成7年9月時点では在籍していた外国人年少者が、この調査期間までに転出、帰国などによって一人も在籍しなくなった学校には、回答してこないケースがある。こうした学校では、少なくとも平成7年度中に日本語教育にかかわった教師は存在するが、調査時点では厳密には日本語教育にかかわる教師でないと考えられる。あらかじめこの点に言及しなかったため、当調査への回答は、学校や教師の判断に任せた。

〔調査実施方法〕

- 調査に先立ち、外国人年少者の多い地域のひとつである東京都新宿区内の公立小・中学校11校35名の教師に対し、プレテストを実施した。  
プレテストの結果等を踏まえ、本調査に向けては外国人年少者の定義の明確化、質問項目の分化、フェイスシート項目の拡充、学校に関するフェイスシートの別票化（質問票を2種用意する）等を行っている。
- 質問票Ⅰは、7段階の評定尺度法による意識調査と、教師の属性等を把握するための教師に関するフェイスシートからなり、調査対象者（外国人年少者の日本語教育にかかわる教師）によって記入されるものである。  
一方、質問票Ⅱは、学校の状況や取組、地域の取組、父母や年少者の属性を聞く学校に関するフェイスシートで、学校長等管理職による記入としている。  
また、これらの質問票への回答は、所属する学校名や所在地の記入以外は、無記名で依頼している。
- 質問票の配付については、都道府県の教育委員会を通じて、日本語教育が必要な外国人児童生徒（平成7年度9月文部省調査）が就学するすべての公立の小・中学校へ質問票一式を郵送し、学校長から該当する教師へ配付してもらった。  
また回答済の質問票は、学校で一括し、国立国語研究所へ直接返送してもらった（郵送及び託送調査）。
- 調査の実施・集計・解析は、社会工学研究所が担当した。

#### 4. 有効票数

質問票を発送した学校数、すなわち、日本語教育が必要な外国人児童生徒（平成7年度9月文部省調査）が就学するすべての公立の小・中学校数は、小学校 2,611校、中学校 1,237校で計 3,848校である。そのうち 3,147校から有効票を得た。

また、該当校における調査対象者数（外国人年少者の日本語教育にかかわる教師）については、学校によって外国人年少者の在籍学級数や日本語教育の指導形態等が異なるため、調査に先立ちその数を把握できないが、合計 8,962人から有効票を得た。これは1校あたり約2.85人の教師から回答を得たことになる。

#### 有効票数

学校数: 3,147校 (小学校 2,173校、中学校 974校)  
教師数: 8,962人 (小学校 6,686人、中学校 2,276校)

5. 日本語教育に関する調査－質問票Ⅰ，質問票Ⅱ

\* 学校コードをご記入ください。  
\* 小学校・中学校の別は1または2の番号でお選びください。

都道府県番号	学校調査番号	1.小 2.中

## 日本語教育に関する調査

— 児童生徒に対する日本語教育のカリキュラムに関する国際的研究 —

### 〔質問票 I 〕

— ご記入の前に —

- ・この調査は、外国人年少者の日本語教育に取り組んでいらっしゃる先生方に、日々お考えになっていることについてお尋ねし、このような教育に向けたカリキュラムを考えるに当たってどのような点に考慮していけばよいかの基礎資料を得るためのものです。
- ・当調査は意識調査ですので、ご自身の学校にあてはまらない状況の場合でも、そのような状況にあった場合どうするかを想定してお答えください。1問に余り長い時間をかけず、直感的に感じたままをお答えください。この調査票は統計的に処理し、研究分析以外の用途に使用するものではありません。
- ・回答は、記入例にしたがい、設問ごとに選択肢の7～1より一つ選んで○印を付けてください。
- ・当調査における「外国人年少者」とは、以下のイ～ハのうち、イ及びロの子どもとしています。

イ. 両親とも日本語を母語としない

ロ. 片親が日本語を母語としない

ハ. 両親とも日本語を母語とする、または母語話者に近い

\* 調査内容に関するお問い合わせは、下記までお願いいたします。

国立国語研究所日本語教育センター日本語教育指導普及部 (TEL 03-5993-7659)

社会工学研究所 日本語教育に関する調査担当 (TEL 03-3403-9053)

以下、ご記入下さい。

◇ 学 校 名 : \_\_\_\_\_ 1. 小学校 2. 中学校 (該当する方に○を)

◇ 住 所 : \_\_\_\_\_

◇ 電 話 番 号 : \_\_\_\_\_

◇ お 立 場 : 1. 日本語担任 ( 外国人年少者のための専任教師 )

(該当するも 2. 日本語担任 ( 派遣等の時間講師 )

のに○を) 3. 外国人年少者のクラスの担任

…「日本語担任」とは、外国人年少者の日本語指導の担当の方です

…「外国人年少者のクラスの担任」とは、外国人年少者の在籍学級担任の方です



- 7. 全面的にそう思う(全面的に賛成する)
- 6. 7と5の間
- 5. 大体そう思う(どちらかという賛成する)
- 4. どちらとも言えない(賛成でも反対でもない)
- 3. あまりそう思わない(どちらかという反対である)
- 2. 3と1の間
- 1. まったくそう思わない(全面的に反対する)

< 設問群 I >

[ 記入例 ] ⇒ 7-~~6~~-5-4-3-2-1

- 1. 日本語学級(「取り出し」クラス)の目的は、在籍学級の授業についていくのに必要な日本語の指導である。 7-6-5-4-3-2-1
- 2. 日本語学級(「取り出し」クラス)の目的は、授業についていくというよりは、学校生活全般への適応に必要な日本語の指導である。 7-6-5-4-3-2-1
- 3. 日本語の日常会話ができるようになったら、日本語指導の時間は減らす。 7-6-5-4-3-2-1
- 4. 日本語での日常会話に大きな支障がない時は、取り出しは行なわない。 7-6-5-4-3-2-1
- 5. 在籍学級での生活に早く適応できるよう、取り出しの時間は最小限に押さえる。 7-6-5-4-3-2-1
- 6. 低学年の子どもは、日本語の習得が早いので、取り出しの時間数を少なくする。 7-6-5-4-3-2-1
- 7. 在籍学級での授業についていけるようになって、外国人年少者が集まる何らかの時間、場を設定する。 7-6-5-4-3-2-1
- 8. 教科指導は、日本語の指導をしばらく行なって言葉の壁がある程度解消した段階で始める。 7-6-5-4-3-2-1
- 9. 外国人年少者は、日本語が不十分な場合でも、年齢相当の学年に編入する。 7-6-5-4-3-2-1
- 10. 母語が同じ子どもは、母語ばかりで話すことがないよう違う学級に入れる。 7-6-5-4-3-2-1
- 11. 場合によっては、(知的障害がない場合でも)外国人年少者を特殊学級に入れる。 7-6-5-4-3-2-1
- 12. 外国人年少者が永住予定か否かで、指導内容を変える。 7-6-5-4-3-2-1
- 13. 外国人年少者の今後の滞在期間の長さによって、指導内容を変える。 7-6-5-4-3-2-1
- 14. 外国人年少者が何歳のときに来日したかで、指導内容を変える。 7-6-5-4-3-2-1
- 15. 子供の母語の能力の程度によって指導内容を変える。 7-6-5-4-3-2-1
- 16. 日本語をまず聞いて理解できるようになってから話す学習、さらに読み書きの学習へ進むように指導する。 7-6-5-4-3-2-1

1. まったくそう思わない(全面的に反対する)  
 2. 3と1の間  
 3. あまりそう思わない(どちらかというと反対である)  
 4. どちらとも言えない(賛成でも反対でもない)  
 5. 大体そう思う(どちらかという賛成する)  
 6. 7と5の間  
 7. 全面的にそう思う(全面的に賛成する)

17. ひらがなは読み書き同時に学習させるのではなく、読みができるようになってから書きに進ませるようにする。 7-6-5-4-3-2-1
18. 漢字は必ずしも日本人の子供と同じ程度までマスターさせなくて良いという考え方で学習させる。 7-6-5-4-3-2-1
19. 日本語指導には、日本語学習用の教科書より、国語の教科書を使うようにする。 7-6-5-4-3-2-1
20. 可能な場合には、母語で書かれた教科書を用意した方が良い。 7-6-5-4-3-2-1
21. (日本人の子供用の)通常の教科書より学習する項目を絞って量を少なくした外国人年少者用の日本語で書かれた教科書があった方が良い。 7-6-5-4-3-2-1
22. 漢字に読みがなをつけた外国人年少者用の教科書があった方が良い。 7-6-5-4-3-2-1
23. ローマ字で書かれた外国人年少者用の教科書があった方が良い。 7-6-5-4-3-2-1
24. 教科学習に必要な基本語彙(例:三角形、試験管)は母語訳を用意する。 7-6-5-4-3-2-1
25. 子供自身が持っている母国に関する知識が活かせるように、例に出すなどして指導するよう心掛ける。 7-6-5-4-3-2-1
26. 学校内では日本語を使うように、例えば休み時間に母語が同じ子供で固まらないよう気を配る。 7-6-5-4-3-2-1
27. 授業中母語でおしゃべりをさせないよう気を配る。 7-6-5-4-3-2-1
28. 母語が同じ子供同士で話し合うことはプラスになるので妨げない。 7-6-5-4-3-2-1
29. 教師が外国人年少者の母語を学習することは、その子供にとって良い影響を与えるので努力する。 7-6-5-4-3-2-1
30. 教師の方から片言でも子供の母語を使ってみるようにする。 7-6-5-4-3-2-1
31. 学校で子供が母語で話す機会を定期的に設けるようにする。 7-6-5-4-3-2-1
32. 子供の学習能力を高めるため、日本語教育と母語教育の両方を行なった方が良い。 7-6-5-4-3-2-1
33. できるだけ早く日本人の子供と同じような態度や行動がとれるように指導する。 7-6-5-4-3-2-1

7. 全的にそう思う(全的に賛成する)  
 6. 7と5の間  
 5. 大体そう思う(どちらかというを賛成する)  
 4. どちらとも言えない(賛成でも反対でもない)  
 3. あまりそう思わない(どちらかというを反対である)  
 2. 3と1の間  
 1. まったくそう思わない(全的に反対する)

- 34. 外国人年少者の持ち物、服装、習慣には柔軟に対応し、日本人年少者と必ずしも同じでないことがあっても認める。 7-6-5-4-3-2-1
- 35. 日本滞在中は、楽しく過ごし、楽しかった思い出を持って帰国してもらうことを最も重要視する。 7-6-5-4-3-2-1
- 36. 日本滞在中は、学力や他の能力を伸ばすことを最も重要視する。 7-6-5-4-3-2-1
- 37. 子供が日本語が全くできない場合に、子供の母語のできるボランティアを在籍学級に用意して付き添い参加してもらう。 7-6-5-4-3-2-1
- 38. 母語が話せる人が外国人年少者の指導にかかわるようにする。 7-6-5-4-3-2-1
- 39. 母語ができる人をきちんと教員として採用し、教えてもらうことが望ましい。 7-6-5-4-3-2-1
- 40. 学校へ編入する前に日本語学習をする場所を設けるべきである。 7-6-5-4-3-2-1
- 41. 外国人年少者が家庭で母語、日本語をどの程度使っているかを把握することに努める。 7-6-5-4-3-2-1
- 42. 家庭では母語で会話するように父母に依頼する。 7-6-5-4-3-2-1
- 43. 家庭でもできるだけ多く日本語を使うように父母に依頼する。 7-6-5-4-3-2-1
- 44. 家庭で父母が勉強を見るように依頼する。 7-6-5-4-3-2-1
- 45. 外国人年少者が母語の歌、遊び、考え方などを日本人の子供に紹介するような機会を多く持たせるようにする。 7-6-5-4-3-2-1
- 46. 外国人年少者の親と日本人の子供の親との交流の場となる行事を積極的に行なう。 7-6-5-4-3-2-1
- 47. 日本語を使うことに抵抗のある子供の場合、多少無理をしても使わせるよう努力する。 7-6-5-4-3-2-1
- 48. 親が日本語の学習はそれほど必要でないという考え方の場合、日本語学習の必要性を説くようにする。 7-6-5-4-3-2-1
- 49. 外国人年少者が母国の人と積極的に交流することは望ましいことである。 7-6-5-4-3-2-1
- 50. 外国人年少者がクラスにいることは、日本人の子供にとって極めてかけがえのない経験をさせることになる。 7-6-5-4-3-2-1

1. まったくそう思わない(全面的に反対する)  
 2. 3と1の間  
 3. あまりそう思わない(どちらかというに反対である)  
 4. どちらとも言えない(賛成でも反対でもない)  
 5. 大体そう思う(どちらかというに賛成する)  
 6. 7と5の間  
 7. 全面的にそう思う(全面的に賛成する)

51. クラスの日本人の子供に対して、外国人の年少者と日本人の子供が 7-6-5-4-3-2-1  
 違う点もあることを良く認識させるよう努める。  
 52. 外国人年少者の指導には専門のカウンセラーの助力が不可欠である。 7-6-5-4-3-2-1  
 53. 思春期の外国人年少者の場合、仲間作りのために、取り出しクラス 7-6-5-4-3-2-1  
 に入れることがある。

< 設問群Ⅱ >

1. 日本語と母語両方を使うことは学習全般にプラスになる。 7-6-5-4-3-2-1  
 2. 日本で生活するには、まず日本語を学習することが必要で、母語の 7-6-5-4-3-2-1  
 ことは余り考えなくても大きな支障はない。  
 3. 日本語が早く上達するように家庭でも日本語を使った方が良いと思 7-6-5-4-3-2-1  
 う。  
 4. 学校と家庭で使う言葉が違っているとどちらの言葉も十分発達しな 7-6-5-4-3-2-1  
 いう。  
 5. 母語を忘れないように家庭では母語を使った方が良いと思う。 7-6-5-4-3-2-1  
 6. 母語が発達すれば日本語の能力の発達にも役立つと思う。 7-6-5-4-3-2-1  
 7. 母語の発達の過程でいろいろな概念(例:原子力、民主主義)が形 7-6-5-4-3-2-1  
 成されていけば、その概念を日本語学習に役立てることができる  
 と思う。  
 8. 母語を忘れてかわりに日本語が使えるようになって、母語も日本 7-6-5-4-3-2-1  
 語も十分できなくなる可能性があると思う。  
 9. 小学校低学年の場合、母語を忘れてもかわりに日本語が上達すれば、 7-6-5-4-3-2-1  
 余り問題は起きないと思う。  
 10. 高学年以上の場合、母語を忘れてもかわりに日本語が上達すれば、 7-6-5-4-3-2-1  
 余り問題は起きないと思う。  
 11. 母語を忘れると心理的発達や親子のコミュニケーションの障害など 7-6-5-4-3-2-1  
 いくつか問題があるので、母語を保持するようにしなければなら  
 ないと思う。

7. 全面的にそう思う（全面的に賛成する）
6. 7と5の間
5. 大体そう思う（どちらかというに賛成する）
4. どちらとも言えない（賛成でも反対でもない）
3. あまりそう思わない（どちらかというに反対である）
2. 3と1の間
1. まったくそう思わない（全面的に反対する）

12. 日本にいるのだから母語を忘れることに余り神経質になる必要はないと思う。 7—6—5—4—3—2—1
13. 小学校低学年の場合、子供たちが母語を失わずに日本語ができるようになる必要があると思う。 7—6—5—4—3—2—1
14. 高学年以上の場合、子供たちが母語を失わずに日本語ができるようになる必要があると思う。 7—6—5—4—3—2—1
15. 親が日本語ができるようになれば子供の学習全般もうまく行くと思う。 7—6—5—4—3—2—1
16. 日本語ができるようになって同じ母語の子供と疎遠になるのは問題があると思う。 7—6—5—4—3—2—1
17. 小学校低学年の場合、母語が一定の水準に達しないうちに日本語を学習しても特に問題はないと思う。 7—6—5—4—3—2—1
18. 高学年以上の場合、母語が一定の水準に達しないうちに日本語を学習しても特に問題はないと思う。 7—6—5—4—3—2—1
19. 日本語の日常会話が不自由しなくなってから、授業を十分理解したり読み書きが不自由なくできるようになるまでに1、2年かかると思う。 7—6—5—4—3—2—1
20. 日本語の日常会話が不自由しなくなってから、授業を十分理解したり読み書きが不自由なくできるようになるまでに5年以上かかると思う。 7—6—5—4—3—2—1
21. 教科学習が難しいのは日本語の能力が足りないからで、日本語をでいるだけ使うことによって日本語能力が高くなれば自然と学習の問題も解消されていくと思う。 7—6—5—4—3—2—1
22. 日常会話に必要な日本語の能力と、授業についていくのに必要な日本語の能力は異なると思う。 7—6—5—4—3—2—1
23. 周囲の人が母国や母語の価値を認める態度をとると、教科学習にも好影響を与えると思う。 7—6—5—4—3—2—1
24. 子供の日本語がうまくなれば、子供の抱える心理的問題は解消すると思う。 7—6—5—4—3—2—1

◇ 記入者ご自身について、うかがいます。あてはまる番号(①、②…)、または数値を枠内にご記入ください。

T 1. 性別

- ① 男性 ② 女性

T 2. 年齢

- ① 20代 ② 30代 ③ 40代 ④ 50代 ⑤ 60代

T 3. お立場

- A. ① 日本語担任 ② 外国人年少者のクラス担任

B. A. で①「日本語担任」とお答えの場合、

日本語指導の時間講師ですか。

- ① はい ② いいえ

C. B. で①「はい」とお答えの場合、

日本語指導を担当されている学校数(巡回している学校数など)

計  校

T 4. 教師、講師のご経験 (1996年 3月で)

- ① 1年以下 ② 1年をこえて2年まで ③ 3～4年  
④ 5～10年 ⑤ 10年以上

T 5. 外国人年少者の指導のご経験 (1996年 3月で)

- ① 1年以下 ② 1年をこえて2年まで ③ 3～4年 ④ 5年以上

T 6. これまで指導にあたった外国人年少者の数

- ① 1人 ② 2～4人 ③ 5～9人 ④ 10人以上

T 7. これまで指導にあたった外国人年少者の母語

A. 外国人年少者の母語として最も多かった言語

- ① スペイン語、ポルトガル語 ② 中国語、韓国語・朝鮮語  
③ 英語 ④ ベトナム語  
⑤ 他のアジア系の言語 ⑥ 他のヨーロッパ系の言語  
⑦ その他の言語

B. 母語の多様性

- ① 指導にあたった子どもの母語は皆同じ(一種類。例えば、ポルトガル語のみ等)である。  
② 指導にあたった子どもの母語は、様々(複数。例えば、スペイン語と中国語等)である。

T 8. 今年度担任または指導されている学年

- ① 小学校1～3年 ② 小学校4～6年 ③ 中学校1～3年

T 9. 外国人年少者指導に関する研修の受講のご経験

- ① あり ② なし

T 10. 外国語学習経験

- ① 日常会話ができる外国語がある ② ない

T 11. 外国語年少者の父母との懇談経験

- ① 1時間程度の懇談経験がある ② それ以上の経験がある ③ 殆どない

これで終わりです。お忙しいところ、ありがとうございました。

\* 学校コードをご記入ください。  
\* 小学校・中学校の別は1または2の番号でお選びください。

都道府 県番号	学校調査番号	1. 小 2. 中

**日本語教育に関する調査**  
— 児童生徒に対する日本語教育のカリキュラムに関する国際的研究 —  
**〔質問票Ⅱ〕**

こちらの質問票は、学校その他の項目についてうかがいます。学校長、または教頭をご記入ください。

S 1. 〔質問票Ⅰ〕に関する該当者、回答者数

- A. 「日本語担任」「外国人年少者のクラス担任」に該当する教師、講師の数 計  人
- B. 実際に〔質問票Ⅰ〕に回答いただいた教師、講師の数  
(返送していただく〔質問票Ⅰ〕部数の合計) 計  人

S 2. 学校全体の児童・生徒の数

 人

S 3. 学校全体の外国人年少者の数

 人

\* 「外国人年少者」は以下のイ～ハのうち、イ及びロの子どもとしています  
イ. 両親とも日本語を母語としない    ロ. 片親が日本語を母語としない  
 ハ. 両親とも日本語を母語とする、または母語話者に近い

S 4. 母語別外国人年少者数

(母語が何であるかご判断に迷われる場合は、「父母どちらかの言語で、日本語でないもの」を母語と考えてご記入ください)

- |          |                                    |
|----------|------------------------------------|
| ① ポルトガル語 | ② 中国語                              |
| ③ スペイン語  | ④ 英語                               |
| ⑤ ベトナム語  | ⑥ 韓国語・朝鮮語                          |
| ⑦ フィリピン語 | ⑧ その他の言語<br>〔                    〕 |
| ⑨ 不明     |                                    |

S 5. 外国人年少者の受け入れ年数

約 計  年

S 6. 外国人年少者の指導の形態（今年度）

- A. 取り出し指導  
① あり      ② なし
- B. 特殊学級で指導  
① あり      ② なし
- C. 在籍（親、原）学級の授業中に（外国人年少者の横に座るなどして）補助する指導  
① あり      ② なし

⇒ 裏面へ続きます

S 7. S 6 A. で①、取り出し授業「あり」の場合

- A. 取り出し授業で教える人は、  
 ① 外国人年少者のための専任教師    ② 日本語指導の時間講師  
 ③ 学校長                                  ④ 教頭                                  ⑤ 教務主任  
 ⑥ 父母などのボランティア（5人以下）  
 ⑦ 父母などのボランティア（6人以上）
- B. 取り出し授業の中心は、  
 ① 日本語指導                              ② 教科指導                              ③ 生活などの適応指導  
 ④ その他〔                                  〕
- C. 取り出しを行なっている外国人年少者の数                              計  人
- S 8. 外国人年少者の指導のための加配（今年度）  
 ① あり    ② なし

- S 9. 学校として行なう外国人年少者に関わる行事（\*あてはまるもの全てを選んで下さい）
- A. ① 外国人年少者が主役の行事                              ② 外国人年少者と日本人の子供両方が主体の行事  
 ③ 外国人年少者とその親を含めた行事    ④ 外国人年少者の親と日本人の子供の親の交流行事  
 ⑤ 外国人年少者の親が集まる会                              ⑥ 特になし  
 ⑦ その他〔                                  〕
- B. その頻度は、年度の中で何回程度か。                              約  回/年

- S 10. 学校で外国人年少者の指導にボランティアを
- A. ① 依頼している                              ② 依頼していない
- B. A. で ①「依頼している」場合  
 ① ボランティアのうち外国人年少者の母語ができる人の数  
 ② ボランティアのうち外国人年少者の母語ができない人の数

- S 11. 外国人年少者の在籍期間  
 ① 多くの場合、短期で1～2年    ② 多くの場合、3年以上

- S 12. 外国人年少者の親の意向など
- A. 日本での滞在期間について、外国人年少者の親の多くは、  
 ① 日本永住希望                              ② 日本短期滞在後帰国希望
- B. 外国人年少者の親の職業の多くは、  
 ① 工場・建設業等労働者                              ② 留学生  
 ③ 研究者    ④ その他〔                                  〕
- C. 子どもの母語の保持について、外国人年少者の親の多くは、  
 ① 子供の母語の保持を希望している    ② 特に希望していない  
 ③ 学校では調べていない
- D. 家庭で子どもと話す言葉について、外国人年少者の親の多くは、  
 ① 母語を使うようにしている                              ② 日本語を使うようにしている  
 ③ 特にどちらでもない                              ④ 学校では調べていない

- S 13. 地域に外国人年少者の母語を保持する学習の場（公民館での学習会など）が  
 ① ある    ② ない

お忙しいところ、ありがとうございました。



## 6. 集計結果（単純集計）

〔図表1. フェイスシート（教師、父母、年少者当人、学校、地域の属性等）〕

質問票のフェイスシート部分の項目において、数字で回答する項目については、回答された数値の幅を適切なカテゴリーに分け、そのカテゴリー毎の度数と構成比を示した。また、選択肢で回答する項目については、選択肢毎に集計した。

これにより、多様な項目からみた回答者の属性が把握できる。

〔図表2. 設問群1（意思決定）、設問群2（言語教育観）の各質問の評定平均値降順（総数）〕

評定平均値（無回答数を除いた回答数で割ったもの）の高い質問項目を、上から順に示した。

特徴として、外国人年少者の受け入れに関する教師側の受け止め方など、全体的なことに関する項目がまず高い位置をしめ、次に技術的な面や現実的な面についての項目が位置しているということが挙げられる。

〔図表3. 設問群1（意思決定）、設問群2（言語教育観）の各質問の評定値等の回答分布（総数）〕

調査項目「(1)外国人年少者の日本語教育にかかわる教師はどのような言語教育観を持っているか」及び「(2)外国人年少者の日本語教育にかかわる教師はどのような意思決定を行っているか」を具体的に問うた質問（設問群1：1～53、設問群2：1～24）への回答について、それぞれ、評定7段階の中でどこに評定されたかを示した。

各質問毎に各評定別の実数と構成比を出し、質問毎に構成比の度数を棒グラフに示した。

図表 1. フェイスシート（教師、父母、年少者当人、学校、地域の属性等）

県別 小・中学校別 回答校数/教師数

県	小学校		中学校		全体	
	校数	教師数(人)	校数	教師数(人)	校数	教師数(人)
北海道	24	38	9	16	33	54
青森	4	9	2	4	6	13
岩手	2	7	0	0	2	7
宮城	18	52	3	7	21	59
秋田	3	5	2	6	5	11
山形	13	35	8	9	21	44
福島	13	46	9	31	22	77
茨城	79	225	38	70	117	295
栃木	47	218	26	72	73	290
群馬	69	300	42	111	111	411
埼玉	121	326	51	123	172	449
千葉	113	365	42	97	155	462
東京	254	709	108	219	362	928
神奈川	189	772	86	249	275	1,021
新潟	20	48	6	11	26	59
富山	28	65	9	15	37	80
石川	11	39	3	5	14	44
福井	31	69	9	18	40	87
山梨	39	121	18	28	57	149
長野	80	254	36	79	116	333
岐阜	52	151	22	39	74	190
静岡	226	789	103	268	329	1,057
愛知	226	746	102	258	328	1,004
三重	43	132	19	48	62	180
滋賀	44	129	18	46	62	175
京都	31	64	15	31	46	95
大阪	153	378	70	162	223	540
兵庫	52	102	29	64	81	166
奈良	23	51	11	19	34	70
和歌山	5	16	2	4	7	20
鳥取	4	7	4	7	8	14
島根	8	17	2	3	10	20
岡山	24	68	10	16	34	84
山口	17	58	5	13	22	71
徳島	5	11	3	4	8	15
香川	11	35	5	16	16	51
愛媛	3	7	4	6	7	13
高知	8	23	6	11	14	34
福岡	32	77	10	25	42	102
佐賀	4	9	2	4	6	13
長崎	1	1	1	8	2	9
熊本	10	19	5	13	15	32
大分	7	9	5	12	12	21
宮崎	6	25	1	1	7	26
鹿児島	11	29	7	15	18	44
沖縄	8	28	5	12	13	40
不明	1	2	1	1	2	3
合計	2,173	6,686	974	2,276	3,147	8,962

## 学校フェースシート集計

### [小学校・中学校]

	校数	比率
合計	3,147	100.0
小学校	2,173	69.0
中学校	974	31.0

### [都道府県]

都道府県	校数	都道府県	校数	都道府県	校数
北海道	33	石川	14	岡山	34
青森	6	福井	40	山口	22
岩手	2	山梨	57	徳島	8
宮城	21	長野	116	香川	16
秋田	5	岐阜	74	愛媛	7
山形	21	静岡	329	高知	14
福島	22	愛知	328	福岡	42
茨城	117	三重	62	佐賀	6
栃木	73	滋賀	62	長崎	2
群馬	111	京都	46	熊本	15
埼玉	172	大阪	223	大分	12
千葉	155	兵庫	81	宮崎	7
東京	362	奈良	34	鹿児島	18
神奈川	275	和歌山	7	沖縄	13
新潟	26	鳥取	8	不明	2
富山	37	島根	10	合計	3,147

質問票Ⅰ 教師に関するフェイスシート集計結果

[T1] 性別

	人数	比率
合計	8,962	100.0
男性	3,473	38.8
女性	5,455	60.9
無回答	34	0.4

[T2] 年齢

	人数	比率
合計	8,962	100.0
20代	1,283	14.3
30代	3,372	37.6
40代	3,345	37.3
50代・60代	921	10.3
無回答	41	0.5

[T3A] 立場

	人数	比率
合計	8,962	100.0
日本語担任	1,914	21.4
外国人年少者のクラス担任	6,705	74.8
無回答	343	3.8

[T3B] 日本語指導の時間講師ですか

	人数	比率
合計	1,914	100.0
はい	465	24.3
いいえ	1,397	73.0
無回答	52	2.7

[T3C] 日本語指導を担当されている学校数（巡回している学校数など）

	人数	比率
合計	465	100.0
1校	209	44.9
2～4校	178	38.3
5校以上	38	8.2
無回答	40	8.6

[T4] 教師、講師の経験

	人数	比率
合計	8,962	100.0
4年以下	1,130	12.6
5～10年	1,709	19.1
10年以上	5,937	66.2
無回答	186	2.1

[T5] 外国人年少者の指導の経験

	人数	比率
合計	8,962	100.0
1年以下	4,352	48.6
1年をこえて2年まで	2,596	29.0
3年以上	1,786	19.9
無回答	228	2.5

[T6] これまで指導にあたった外国人年少者の数

	人数	比率
合計	8,962	100.0
1人	3,657	40.8
2～4人	3,499	39.0
5～9人	830	9.3
10人以上	736	8.2
無回答	240	2.7

[T7A] これまで指導にあたった外国人年少者の母語として最も多かった言語

	人数	比率
合計	8,962	100.0
スペイン語、ポルトガル語	4,210	47.0
中国語、韓国語・朝鮮語	2,976	33.2
英語	411	4.6
ベトナム語	243	2.7
他のアジア系の言語	491	5.5
他のヨーロッパ系の言語・その他の言語	154	1.7
無回答	477	5.3

[T7B] 母語の多様性

	人数	比率
合計	8,962	100.0
指導にあたった子どもの母語は皆同じ	5,680	63.4
指導にあたった子どもの母語は、様々である	2,697	30.1
無回答	585	6.5

[T8] 今年度担任または指導されている学年

	人数	比率
合計	8,962	100.0
小学校1～3年	3,265	36.4
小学校4～6年	2,829	31.6
中学校1～3年	2,192	24.5
その他・無回答	676	7.5

[T9] 外国人年少者指導に関する研修の受講の経験

	人数	比率
合計	8,962	100.0
あり	1,266	14.1
なし	7,597	84.8
無回答	99	1.1

[T10] 外国語学習経験

	人数	比率
合計	8,962	100.0
日常会話ができる外国語がある	1,390	15.5
ない	7,473	83.4
無回答	99	1.1

[T11] 外国語年少者の父母との懇談経験

	人数	比率
合計	8,962	100.0
1時間程度の懇談経験がある	3,801	42.4
それ以上の経験がある	2,669	29.8
殆どない	2,382	26.6
無回答	110	1.2

質問票Ⅱ 学校に関するフェイスシート集計結果

[S1A] 該当する教師、講師の数

	校数	比率
合計	3,147	100.0
1人	1,008	32.0
2人	552	17.5
3人	437	13.9
4人	222	7.1
5人以上	519	16.5
無回答	409	13.0

[S1B] 回答いただいた教師、講師の数

	校数	比率
合計	3,147	100.0
1人	1,089	34.6
2～4人	1,616	51.4
5～9人	340	10.8
10人以上	102	3.2

[S2] 学校全体の児童・生徒の数

	校数	比率
合計	3,147	100.0
～99人	31	1.0
100～199人	93	3.0
200～399人	621	19.7
400～599人	1,036	32.9
600～799人	787	25.0
800～999人	377	12.0
1,000人以上	117	3.7
無回答	85	2.7

[S3] 学校全体の外国人年少者の数

	校数	比率
合計	3,147	100.0
1人	762	24.2
2～4人	1,241	39.4
5～9人	649	20.6
10～19人	310	9.9
20～29人	51	1.6
30人以上	45	1.4
無回答	89	2.8

[S4] 母語別 外国人年少者が在籍している学校数(複数回答)

	校数	比率
合計	5,333	169.5
中国語	1,458	46.3
ポルトガル語	1,371	43.6
スペイン語	696	22.1
韓国語・朝鮮語	500	15.9
フィリピン語	417	13.3
英語	326	10.4
ベトナム語	202	6.4
その他の言語	344	10.9
不明	19	0.6

(母数：3,147)

[その他の言語の内訳 複数回答]

言語	校数	言語	校数
ラオス語	46	スロバキニア語	2
タイ語	45	スワヒリ語	2
ロシア語	35	セルビア語	2
カンボジア語	31	タミール語	2
フランス語	16	ダリ語	2
イラン語	15	デンマーク語	2
インドネシア語	15	フィンランド語	2
モンゴル語	9	アフガニスタン語	1
イタリア語	8	カザフスター語	1
ヒンズー語	8	キール語	1
ペルシャ語	8	ギリシャ語	1
ドイツ語	7	クロアチア語	1
バングラディッシュ語	7	シリア語	1
マレーシア語	7	トルコ語	1
アラビア語	5	トンガ語	1
スリランカ語	5	ノルウェー語	1
ベンガル語	5	パラグワイ語	1
ポーランド語	5	ハンガリー語	1
ミャンマー語	5	フィジー語	1
ネパール語	4	ヘブライ語	1
ブルガリア語	4	マジャール語	1
ウルドゥ語	3	マラチ語	1
シンハラ語	3	ルーマニア語	1
パキスタン語	3	ワラニ語	1
スウェーデン語	2	合計	327



[S5] 受入れ年数

	校数	比率
合計	3,147	100.0
1～4年	1,893	60.2
5～9年	742	23.6
10～19年	236	7.5
20年以上	55	1.7
無回答	221	7.0

[S6A] 取出し指導

	校数	比率
合計	3,147	100.0
あり	1,974	62.7
なし	1,110	35.3
無回答	63	2.0

[S6B] 特殊学級で指導

	校数	比率
合計	3,147	100.0
あり	249	7.9
なし	2,662	84.6
無回答	236	7.5

[S6C] 在籍学級授業中の補助指導

	校数	比率
合計	3,147	100.0
あり	942	29.9
なし	2,106	66.9
無回答	99	3.1

[S7A] 取り出し授業で教える人は(複数回答)

	校数	比率
合計	2,028	102.7
外国人少年者のための専任教師	717	36.3
日本語指導の時間講師	803	40.7
学校長・教頭	209	10.6
教務主任	231	11.7
父母などのボランティア	68	3.4

(母数：1,974)

[S7B] 取出し授業の中心

	校数	比率
合計	1,974	100.0
日本語指導	1,503	76.1
教科指導	194	9.8
生活などの適応指導	91	4.6
その他・無回答	186	9.4

[S7C] 取り出しを行なっている外国人年少者の数

	校数	比率
合計	1,974	100.0
1人	677	34.3
2～4人	760	38.5
5～9人	304	15.4
10～15人	117	5.9
16人以上	48	2.4
無回答	68	3.4

[S8] 外国人年少者の指導のための加配

	校数	比率
合計	3,147	100.0
あり	692	22.0
なし	2,321	73.8
無回答	134	4.3

[S9A] 学校として行なう外国人少年者に関わる行事(複数回答)

	校数	比率
合計	3,760	119.5
外国人年少者が主役の行事	227	7.2
外国人年少者と日本人の子供両方が主体の行事	473	15.0
外国人年少者とその親を含めた行事	252	8.0
外国人年少者の親と日本人の子供の親の交流行事	166	5.3
外国人年少者の親が集まる会	150	4.8
特になし	2,232	70.9
その他	55	1.7
無回答	205	6.5

(母数：3,147)

[S9B] その頻度は、年度の中で何回程度か

	校数	比率
合計	742	100.0
1回	221	29.8
2～4回	333	44.9
5～9回	121	16.3
10回以上	67	9.0

[S10A] 学校で外国人年少者の指導にボランティアを依頼

	校数	比率
合計	3,147	100.0
依頼している	247	7.8
依頼していない	2,767	87.9
無回答	133	4.2

[S10B\_1] ボランティアのうち外国人年少者の母語ができる人の数

	校数	比率
合計	247	100.0
1人	148	59.9
2～4人	45	18.2
5人以上	8	3.2
無回答	46	18.6

[S10B\_2] ボランティアのうち外国人年少者の母語ができない人の数

	校数	比率
合計	247	100.0
1人	21	8.5
2～4人	8	3.2
5人以上	12	4.9
無回答	206	83.4

[S11] 外国人年少者の在籍期間

	校数	比率
合計	3,147	100.0
1～2年	1,022	32.5
3年以上	1,923	61.1
無回答	202	6.4

[S12A] 日本での滞在期間について、外国人年少者の親の多くは

	校数	比率
合計	3,147	100.0
日本永住希望	1,481	47.1
日本短期滞在後帰国希望	1,480	47.0
無回答	186	5.9

[S12B] 外国人年少者の親の職業の多くは

	校数	比率
合計	3,147	100.0
工場・建設業等労働者	2,074	65.9
留学生	130	4.1
研究者	128	4.1
その他・無回答	815	25.9

[その他の内訳]

	校数	比率
合計	665	100.0
一般企業	171	25.7
公務員・団体職員	15	2.3
自営業	39	5.9
飲食・サービス業	76	11.4
主婦・無職	35	5.3
大使館・領事館	13	2.0
その他・無記入	316	47.5

[S12C] 子供の母語の保持について、外国人年少者の親の多くは

	校数	比率
合計	3,147	100.0
子供の母語の保持を希望している	920	29.2
特に希望していない	496	15.8
学校では調べていない	1,639	52.1
無回答	92	2.9

[S12D] 家庭で子供と話す言葉について、外国人年少者の親の多くは

	校数	比率
合計	3,147	100.0
母語を使うようにしている	1,266	40.2
日本語を使うようにしている	397	12.6
特にどちらでもない	535	17.0
学校では調べていない	852	27.1
無回答	97	3.1

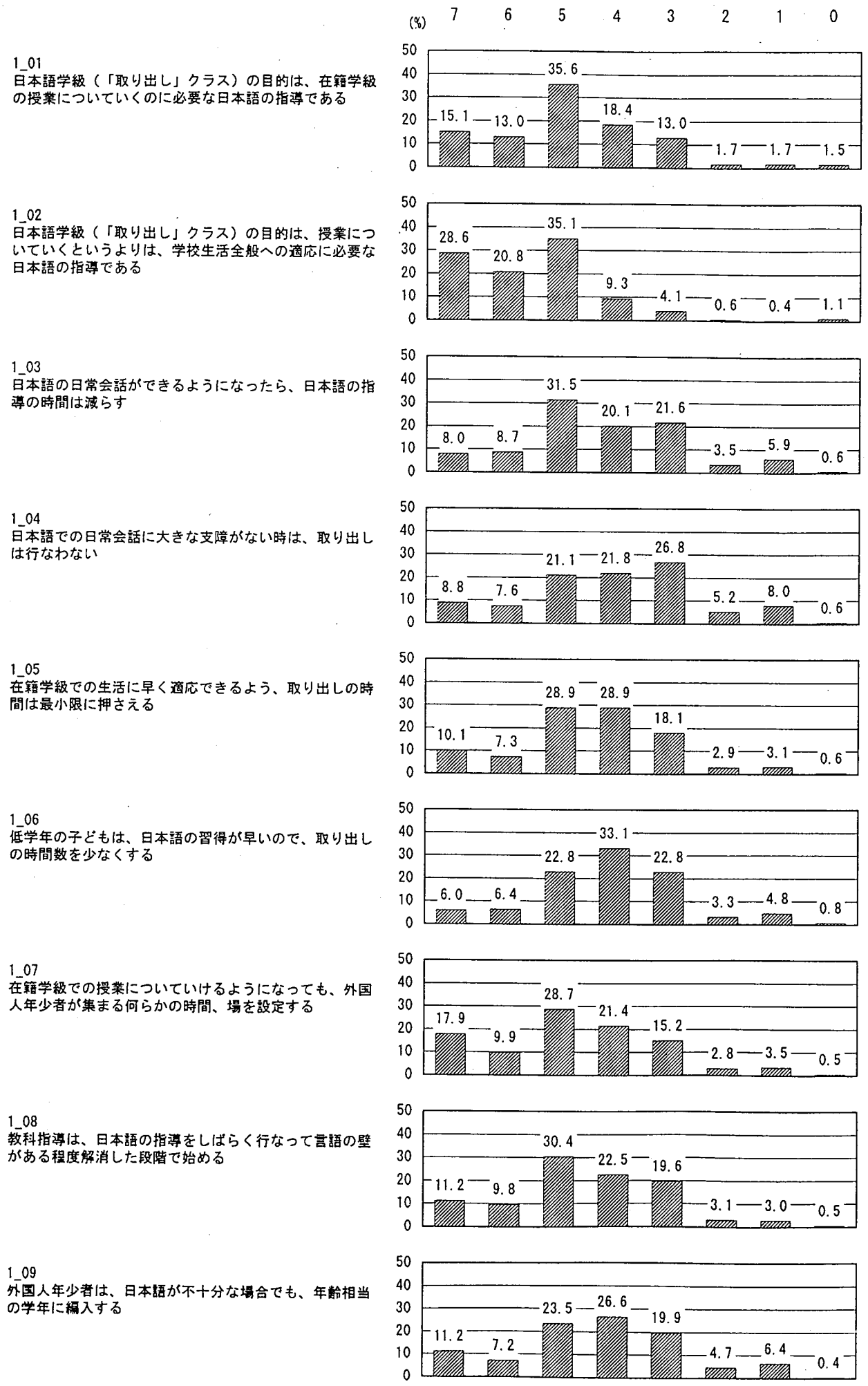
[S13] 地域に外国人年少者の母語を保持する学習の場が

	校数	比率
合計	3,147	100.0
ある	452	14.4
ない	2,609	82.9
無回答	86	2.7

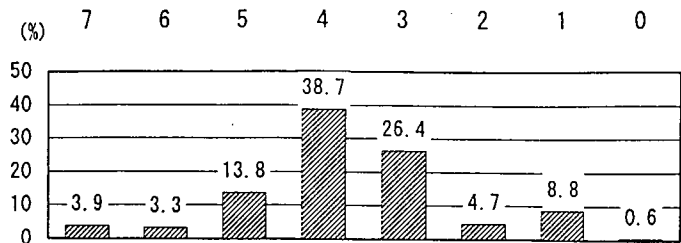
〔図表2. 設問群1（意思決定），設問群2（言語教育観）の各質問の評定平均値降順（総数）〕

順位		質問番号	平均値
1	外国人年少者がクラスにいることは、日本人の子供にとって極めてかけがえのない経験をさせることになる	1 50	6.00
2	クラスの日本人の子供に対して、外国人の年少者と日本人の子供が違う点もあることを良く認識させるよう努める	1 51	5.92
3	日本語学級（「取り出し」クラス）の目的は、授業についていくというよりは、学校生活全般への適応に必要な日本語の指導である	1 02	5.58
4	外国人年少者が母国の人と積極的に交流することは望ましいことである	1 49	5.48
5	外国人年少者が母語の歌、遊び、考え方などを日本人の子供に紹介するような機会を多く持たせるようにする	1 45	5.46
6	漢字に読みがなをつけた外国人年少者用の教科書があった方がよい	1 22	5.35
7	子供自身が持っている母国に関する知識が活かせるように、例に出すなどして指導するよう心掛ける	1 25	5.33
8	外国人年少者の持ち物、服装、習慣には柔軟に対応し、日本人年少者と必ずしも同じでないことがあっても認める	1 34	5.28
9	外国人年少者が家庭で母語、日本語をどの程度使っているかを把握することに努める	1 41	5.28
10	教師が外国人年少者の母語を学習することは、その子供にとって良い影響を与えるので努力する	1 29	5.28
11	教師の方から片言でも子供の母語を使ってみるようにする	1 30	5.28
12	外国人年少者の指導には専門のカウンセラーの助力が不可欠である	1 52	5.26
13	母語ができる人をきちんと教員として採用し、教えてもらうことが望ましい	1 39	5.23
14	教科学習に必要な基本語彙（例：三角形、試験管）は母語訳を用意する	1 24	5.17
15	母語が話せる人が外国人年少者の指導にかかわるようにする	1 38	5.14
16	通常の教科書より学習する項目を絞って量を少なくした外国人年少者用の日本語で書かれた教科書があった方がよい	1 21	5.12
17	外国人年少者の親と日本人の子供の親との交流の場となる行事を積極的に行う	1 46	5.11
18	母語が同じ子供同士で話し合うことはプラスになるので妨げない	1 28	5.04
19	日本滞在中は、楽しく過ごし、楽しかった思い出を持って帰国してもらうことを最も重要視する	1 35	4.96
20	学校へ編入する前に日本語学習をする場所を設けるべきである	1 40	4.94
21	日本語学級（「取り出し」クラス）の目的は、在籍学級の授業についていくのに必要な日本語の指導である	1 01	4.87
22	子供が日本語が全くできない場合に、子供の母語のできるボランティアを在籍学級に用意して付き添い参加してもらう	1 37	4.84
23	在籍学級での授業についていけるようになって、外国人年少者が集まる何らかの時間、場を設定する	1 07	4.71
24	ローマ字で書かれた外国人年少者用の教科書があった方がよい	1 23	4.62
25	子供の母語の能力程度によって指導内容を変える	1 15	4.58
26	思春期の外国人年少者の場合、仲間作りのために、取り出しクラスに入れることがある	1 53	4.53
27	漢字は必ずしも日本人の子供と同じ程度までマスターさせなくて良いという考え方で学習させる	1 18	4.50
28	子供の学習能力を高めるため、日本語教育と母語教育の両方を行なった方がよい	1 32	4.50
29	教科指導は、日本語の指導をしばらく行なって言語の壁がある程度解消した段階で始める	1 08	4.49
30	学校で子供が母語で話す機会を定期的に設けるようにする	1 31	4.48
31	できるだけ早く日本人の子供と同じような態度や行動がとれるように指導する	1 33	4.45
32	在籍学級での生活に早く適応できるよう、取り出しの時間は最小限に押さえる	1 05	4.41
33	親が日本語の学習はそれほど必要でないという考え方の場合、日本語学習の必要性を説くようにする	1 48	4.36
34	日本語の日常会話ができるようになったら、日本語の指導の時間は減らす	1 03	4.27
35	可能な場合には、母語で書かれた教科書を用意した方がよい	1 20	4.26
36	外国人年少者が何歳のときに来日したかで、指導内容を変える	1 14	4.25
37	外国人年少者は、日本語が不十分な場合でも、年齢相当の学年に編入する	1 09	4.23
38	日本語をまず聞いて理解できるようになってから話す学習、さらに読み書きの学習へ進むように指導する	1 16	4.13
39	低学年の子どもは、日本語の習得が早いので、取り出しの時間数を少なくする	1 06	4.10
40	家庭でもできるだけ多く日本語を使うように父母に依頼する	1 43	4.03
41	家庭で父母が勉強を見るように依頼する	1 44	4.03
42	日本滞在中は、学力や他の能力を伸ばすことを最も重要視する	1 36	4.02
43	日本語での日常会話に大きな支障がない時は、取り出しは行なわない	1 04	4.02
44	学校内では日本語を使うように、例えば休み時間に母語が同じ子供で固まらないよう気を配る	1 26	3.97
45	日本語を使うことに抵抗のある子供の場合、多少無理をしても使わせるよう努力する	1 47	3.91
46	家庭では母語で会話するように父母に依頼する	1 42	3.82
47	授業中母語でおしゃべりをさせないよう気を配る	1 27	3.70
48	母語が同じ子どもは、母語ばかりで話すことがないよう違う学級に入れる	1 10	3.70
49	ひらがなは読み書き同時に学習させるのではなく、読みができるようになってから書きに進ませるようにする	1 17	3.62
50	外国人年少者の今後の滞在期間の長さによって、指導内容を変える	1 13	3.58
51	外国人年少者が永住予定か否かで、指導内容を変える	1 12	3.49
52	日本語指導には、日本語学習用の教科書より、国語の教科書を使うようにする	1 19	3.44
53	場合によっては、（知的障害がない場合でも）外国人年少者を特殊学級に入れる	1 11	2.16
1	周囲の人が母国や母語の価値を認める態度をとると、教科学習にも好影響を与えると思う	2 23	5.24
2	母語の発達過程でいろいろな概念が形成されていけば、その概念を日本語学習に役立てることができると思う	2 07	5.11
3	日本語と母語両方を使うことは学習全般にプラスになる	2 01	5.09
4	高学年以上の場合、子供たちが母語を失わずに日本語ができるようになる必要があると思う	2 14	5.01
5	日常会話に必要な日本語の能力と、授業についていくのに必要な日本語の能力は異なると思う	2 22	5.00
6	母語を忘れると心理的発達や親子のコミュニケーションの障害などいくつか問題があるので、母語を保持するようにしなければならぬと思う	2 11	4.96
7	親が日本語ができるようになれば子供の学習全般うまく行くと思う	2 15	4.90
8	小学校低学年の場合、子供たちが母語を失わずに日本語ができるようになる必要があると思う	2 13	4.81
9	日本語の日常会話が不自由しなくなってから授業を十分理解したり読み書きが不自由なくできるようになるまでに1、2年かかると思う	2 19	4.71
10	日本語ができるようになって同じ母語の子供と疎遠になるのは問題があると思う	2 16	4.60
11	小学校低学年の場合、母語が一定の水準に達しないうちに日本語を学習しても特に問題はないと思う	2 17	4.57
12	母語が発達すれば日本語の能力の発達にも役立つと思う	2 06	4.53
13	高学年以上の場合、母語が一定の水準に達しないうちに日本語を学習しても特に問題はないと思う	2 18	4.49
14	母語を忘れないように家庭では母語を使った方がよいと思う	2 05	4.45
15	日本語をできるだけ使うことによって日本語能力が高くなれば自然と学習の問題も解消されていくと思う	2 21	4.40
16	子供の日本語がうまくなれば、子供の抱える心理的問題は解消すると思う	2 24	4.38
17	日本語が早く上達するように家庭でも日本語を使った方がよいと思う	2 03	4.30
18	日本語の日常会話が不自由しなくなってから授業を十分理解したり読み書きが不自由なくできるようになるまでに5年以上かかると思う	2 20	4.05
19	母語を忘れてかわりに日本語が使えようになっても、母語も日本語も十分でなくなる可能性があると思う	2 08	3.82
20	小学校低学年の場合、母語を忘れてもかわりに日本語が上達すれば、余り問題は起きないと思う	2 09	3.76
21	日本にいるのだから母語を忘れることに余り神経質になる必要はないと思う	2 12	3.72
22	高学年以上の場合、母語を忘れてもかわりに日本語が上達すれば、余り問題は起きないと思う	2 10	3.66
23	日本で生活するには、まず日本語を学習することが必要で、母語のことは余り考えなくても大きな支障はない	2 02	3.57
24	学校と家庭で使う言葉が違うとどちらの言葉も十分発達しないと思う	2 04	3.33

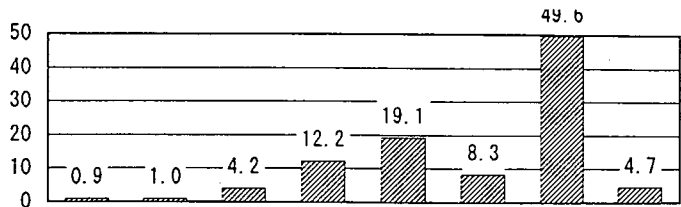
〔図表3. 設問群1（意思決定），設問群2（言語教育観）の各質問の評定値等の回答分布〕



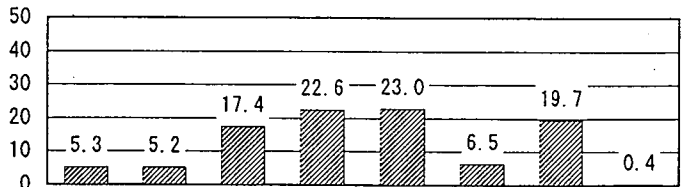
1\_10  
母語が同じ子どもは、母語ばかりで話すことがないよう  
違う学級に入れる



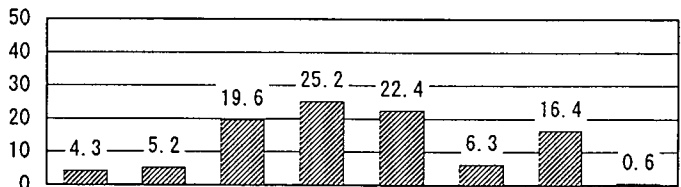
1\_11  
場合によっては、(知的障害がない場合でも) 外国人年  
少者を特殊学級に入れる



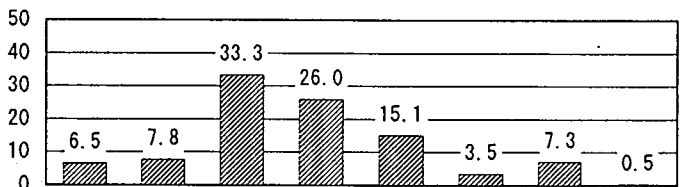
1\_12  
外国人年少者が永住予定か否かで、指導内容を変える



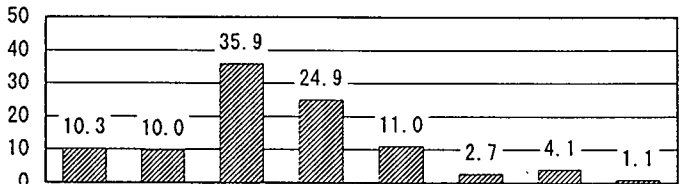
1\_13  
外国人年少者の今後の滞在期間の長さによって、指導内  
容を変える



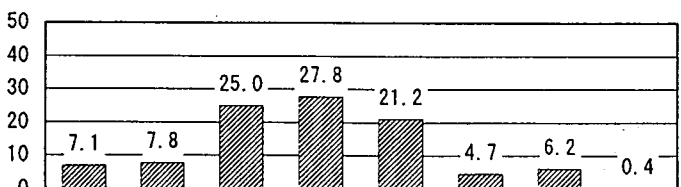
1\_14  
外国人年少者が何歳のときに来日したかで、指導内容を  
変える



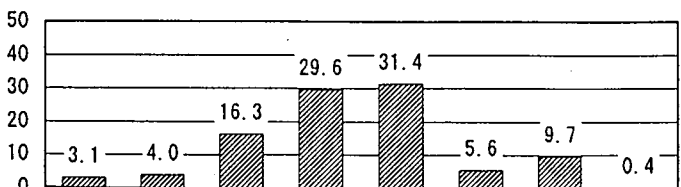
1\_15  
子供の母語の能力程度によって指導内容を変える



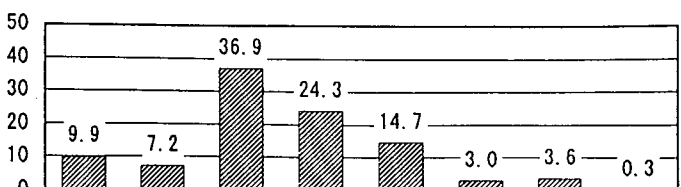
1\_16  
日本語をまず聞いて理解できるようになってから話す学  
習、さらに読み書きの学習へ進むように指導する



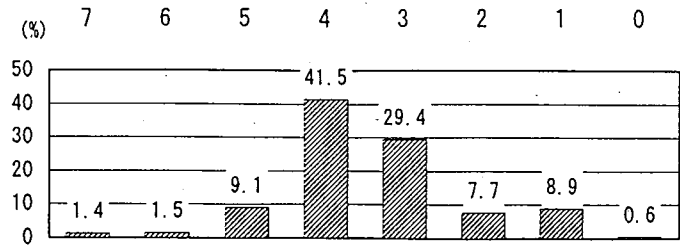
1\_17  
ひらがなは読み書き同時に学習させるのではなく、読み  
ができるようになってから書きに進ませるようにする



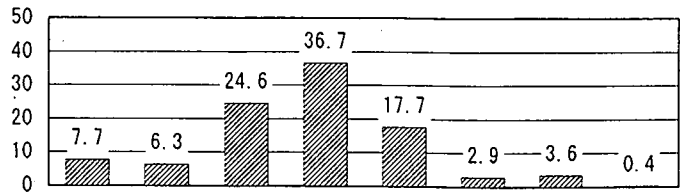
1\_18  
漢字は必ずしも日本人の子供と同じ程度までマスターさ  
せなくて良いという考え方で学習させる



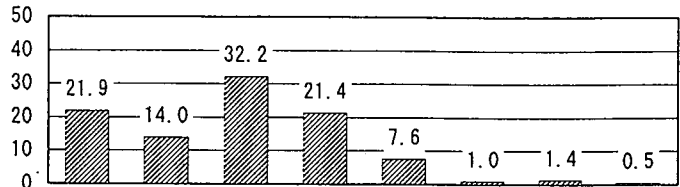
1\_19  
日本語指導には、日本語学習用の教科書より、国語の教科書を使うようにする



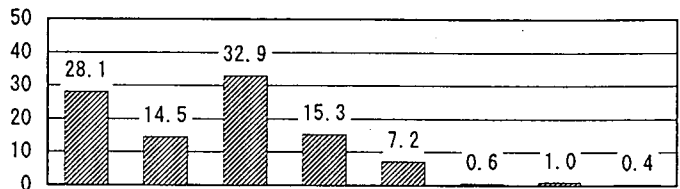
1\_20  
可能な場合には、母語で書かれた教科書を用意した方が良い



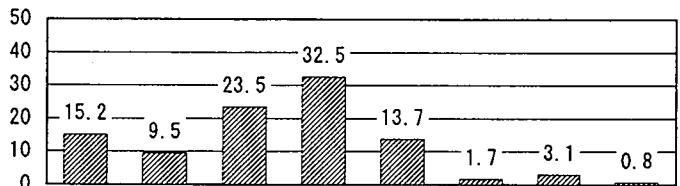
1\_21  
通常の教科書より学習する項目を絞って量を少なくした外国人年少者用の日本語で書かれた教科書があった方が良い



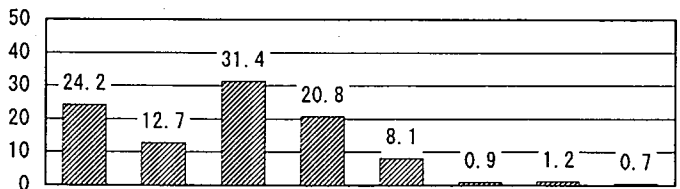
1\_22  
漢字に読みがなをつけた外国人年少者用の教科書があった方が良い



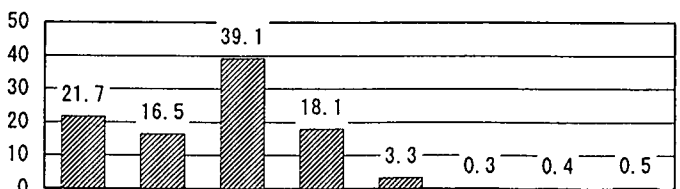
1\_23  
ローマ字で書かれた外国人年少者用の教科書があった方が良い



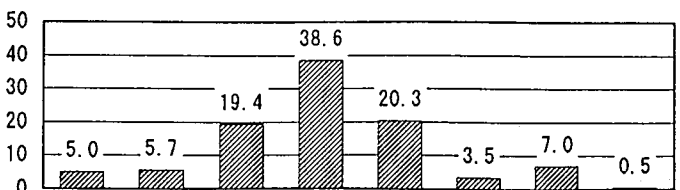
1\_24  
教科学習に必要な基本語彙（例：三角形、試験管）は母語訳を用意する



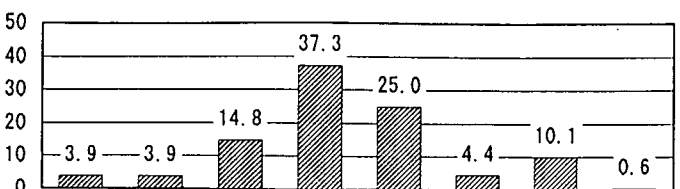
1\_25  
子供自身が持っている母国に関する知識が活かせるように、例に出すなどして指導するよう心掛ける



1\_26  
学校内では日本語を使うように、例えば休み時間に母語が同じ子供で固まらないよう気を配る

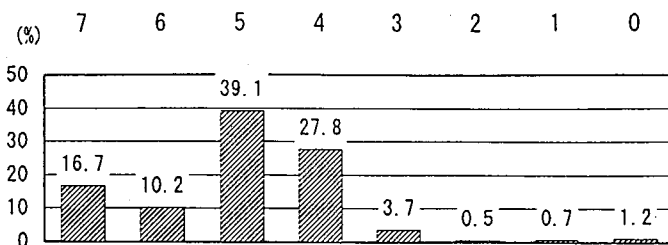


1\_27  
授業中母語でおしゃべりをさせないように気を配る

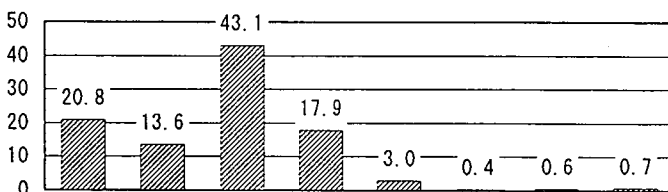




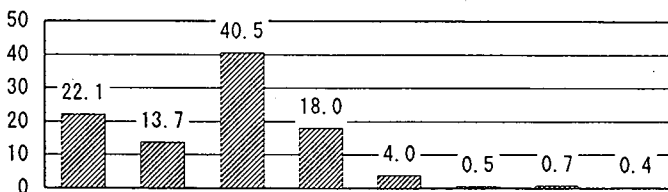
1\_28  
母語が同じ子供同士で話し合うことはプラスになるので妨げない



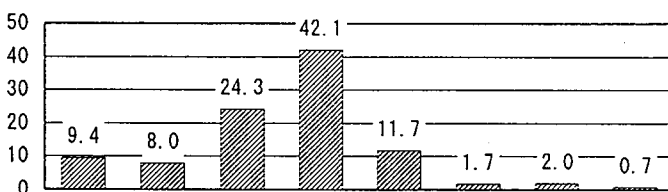
1\_29  
教師が外国人年少者の母語を学習することは、その子供にとって良い影響を与えるので努力する



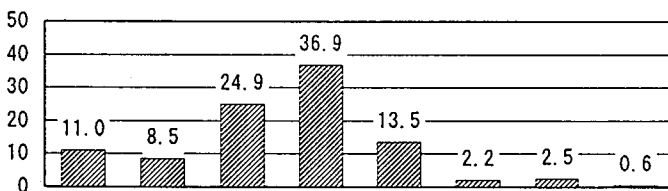
1\_30  
教師の方から片言でも子供の母語を使ってみようとする



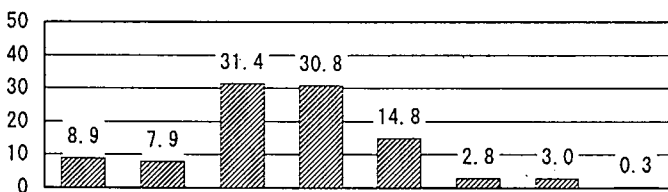
1\_31  
学校で子供が母語で話す機会を定期的に設けるようにする



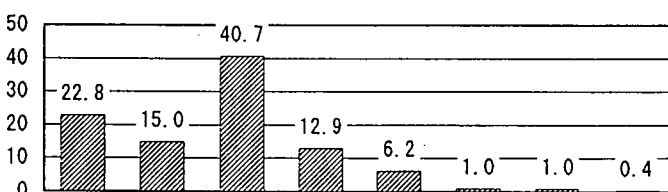
1\_32  
子供の学習能力を高めるため、日本語教育と母語教育の両方を行なった方が良い



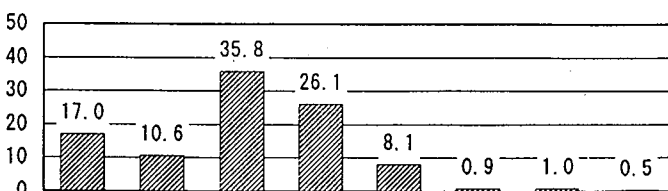
1\_33  
できるだけ早く日本人の子供と同じような態度や行動がとれるように指導する



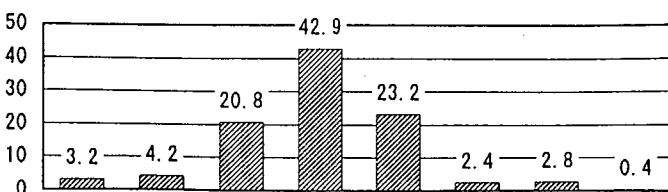
1\_34  
外国人年少者の持ち物、服装、習慣には柔軟に対応し、日本人年少者と必ずしも同じでないことがあっても認める



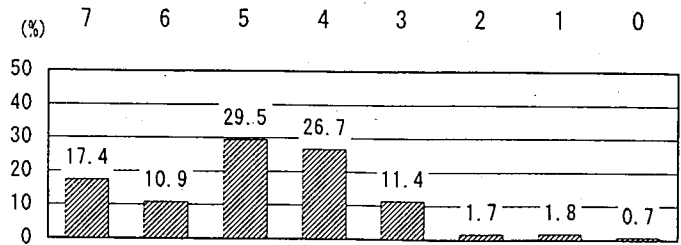
1\_35  
日本滞在中は、楽しく過ごし、楽しかった思い出を持って帰国してもらうことを最も重要視する



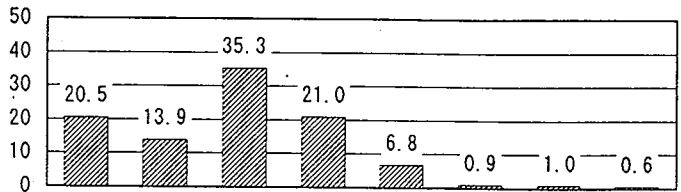
1\_36  
日本滞在中は、学力や他の能力を伸ばすことを最も重要視する



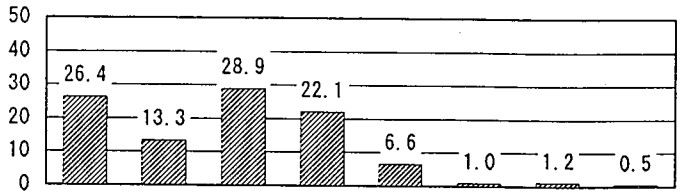
1\_37  
 子供が日本語が全くできない場合に、子供の母語のできるボランティアを在籍学級に用意して付き添い参加してもらう



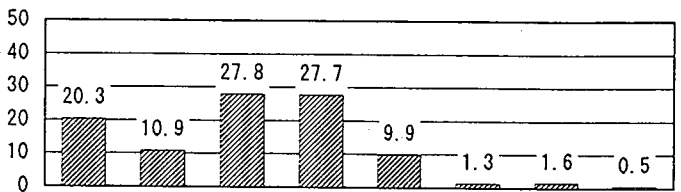
1\_38  
 母語が話せる人が外国人年少者の指導にかかわるようにする



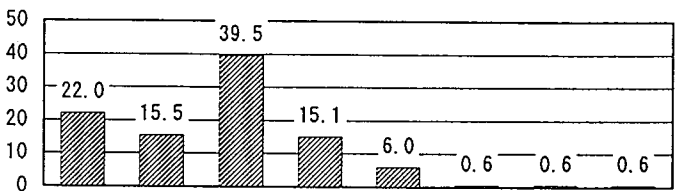
1\_39  
 母語ができる人をきちんと教員として採用し、教えてもらうことが望ましい



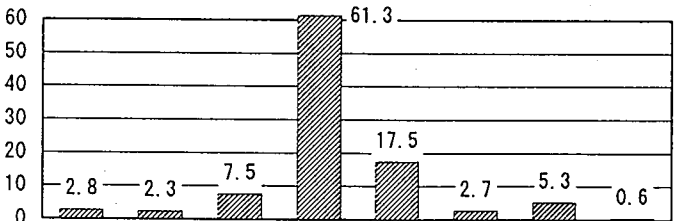
1\_40  
 学校へ編入する前に日本語学習をする場所を設けるべきである



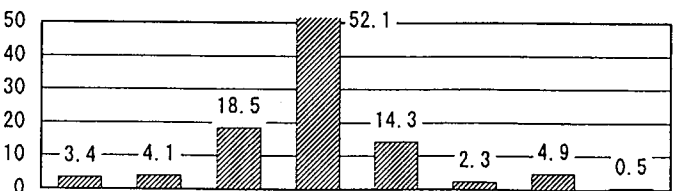
1\_41  
 外国人年少者が家庭で母語、日本語をどの程度使っているかを把握することに努める



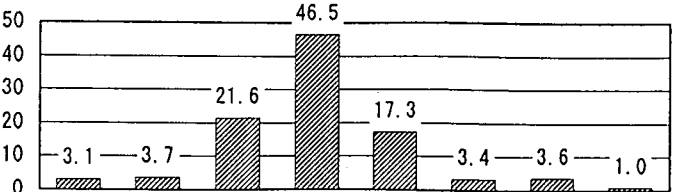
1\_42  
 家庭では母語で会話するように父母に依頼する



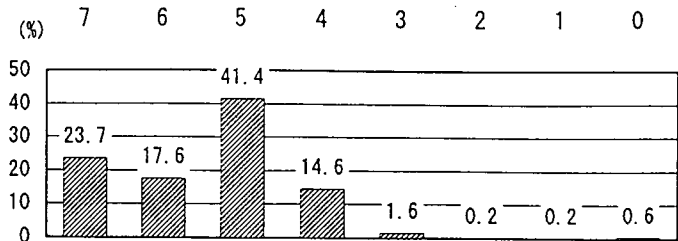
1\_43  
 家庭でもできるだけ多く日本語を使うように父母に依頼する



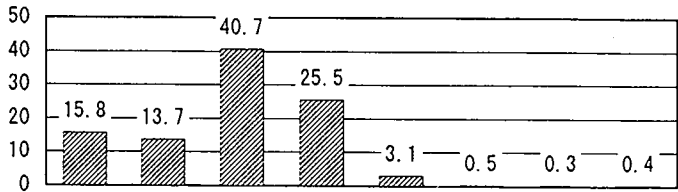
1\_44  
 家庭で父母が勉強を見るように依頼する



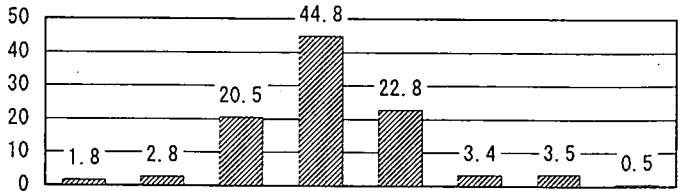
1\_45  
外国人年少者が母語の歌、遊び、考え方などを日本人の  
子供に紹介するような機会を多く持たせるようにする



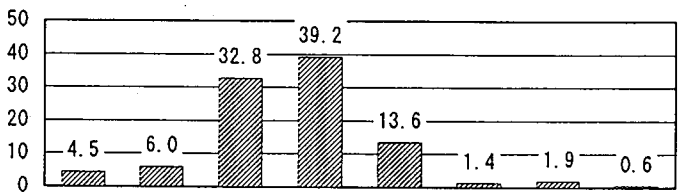
1\_46  
外国人年少者の親と日本人の子供の親との交流の場とな  
る行事を積極的に行う



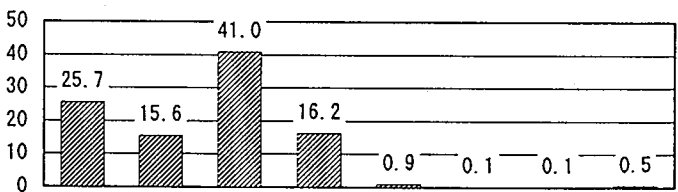
1\_47  
日本語を使うことに抵抗のある子供の場合、多少無理を  
しても使わせるよう努力する



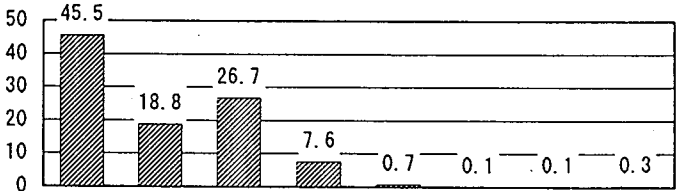
1\_48  
親が日本語の学習はそれほど必要でないという考え方の  
場合、日本語学習の必要性を説くようにする



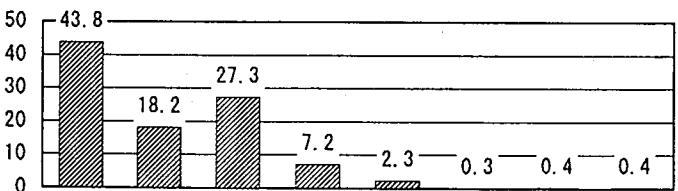
1\_49  
外国人年少者が母国の人と積極的に交流することは望ま  
しいことである



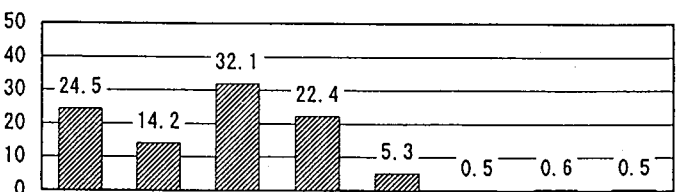
1\_50  
外国人年少者がクラスにいることは、日本人の子供に  
とって極めてかけがえのない経験をさせることになる



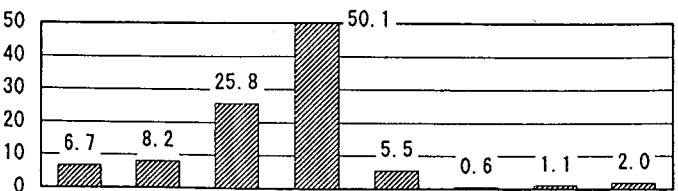
1\_51  
クラスの日本人の子供に対して、外国人の年少者と日本  
人の子供が違う点もあることを良く認識させるよう努め  
る



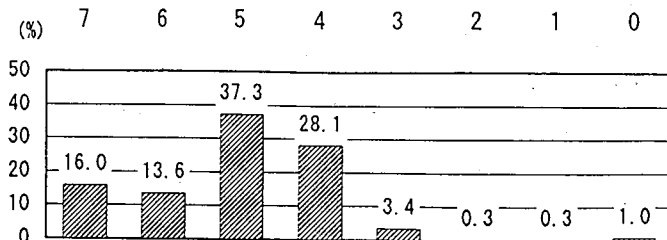
1\_52  
外国人年少者の指導には専門のカウンセラーの助力が不  
可欠である



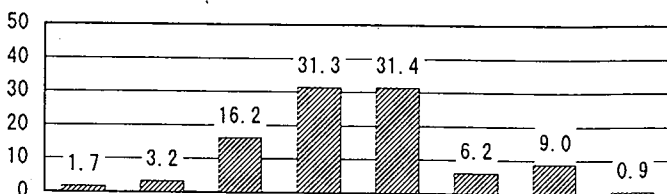
1\_53  
思春期の外国人年少者の場合、仲間作りのために、取り  
出しクラスに入れることがある



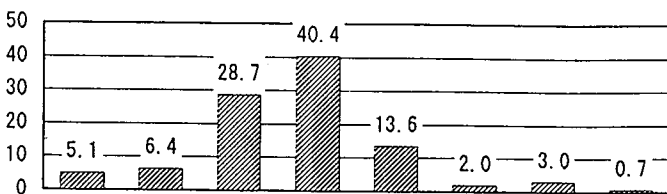
2\_01  
日本語と母語両方を使うことは学習全般にプラスになる



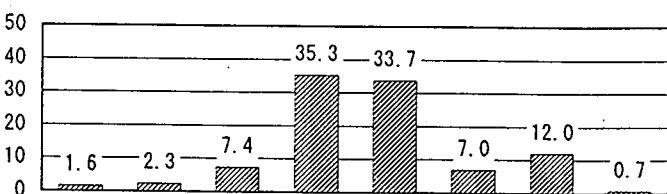
2\_02  
日本で生活するには、まず日本語を学習することが必要で、母語のことは余り考えなくても大きな支障はない



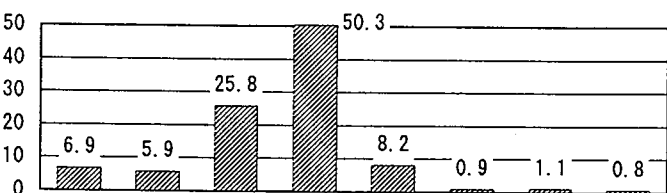
2\_03  
日本語が早く上達するように家庭でも日本語を使った方が良いと思う



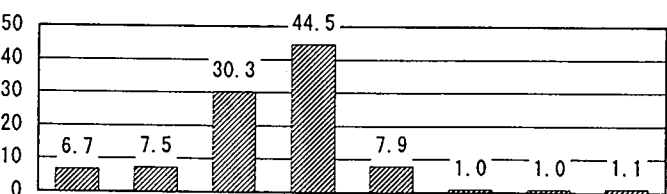
2\_04  
学校と家庭で使う言葉が違っているとどちらの言葉も十分発達しないと思う



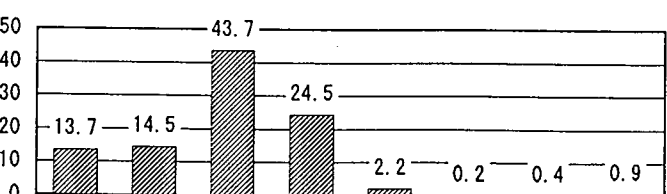
2\_05  
母語を忘れないように家庭では母語を使った方が良いと思う



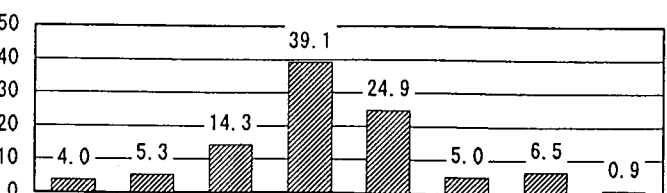
2\_06  
母語が発達すれば日本語の能力の発達にも役立つと思う



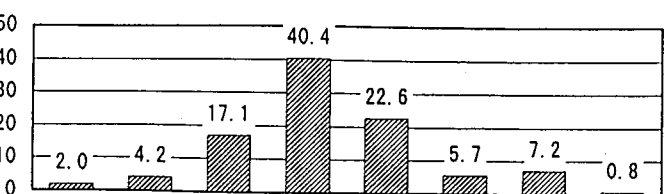
2\_07  
母語の発達の過程でいろいろな概念が形成されていけば、その概念を日本語学習に役立てることができると思う



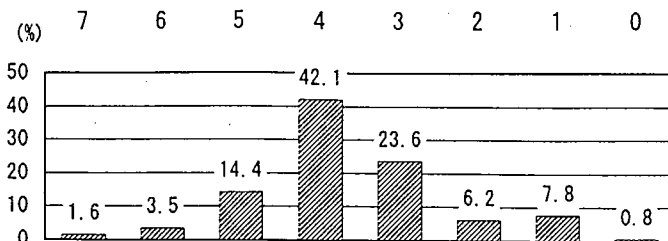
2\_08  
母語を忘れてかわりに日本語が使えるようになって、母語も日本語も十分にできなくなる可能性があると思う



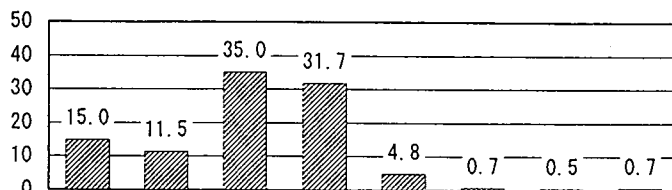
2\_09  
小学校低学年の場合、母語を忘れてもかわりに日本語が上達すれば、余り問題は起きないと思う



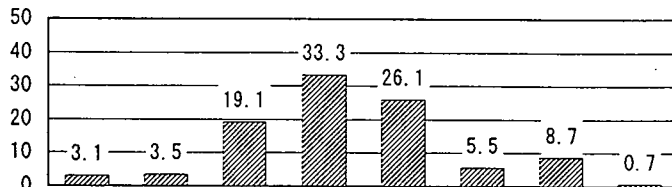
2\_10  
 高学年以上の場合、母語を忘れてもかわりに日本語が上達すれば、余り問題は起きないと思う



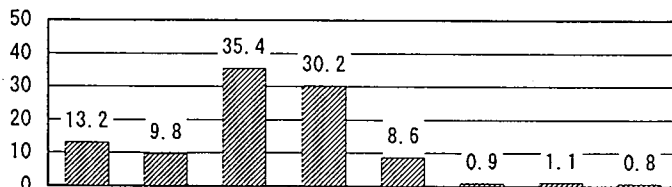
2\_11  
 母語を忘れると心理的発達や親子のコミュニケーションの障害などいくつか問題があるので、母語を保持するようにしなければならないと思う



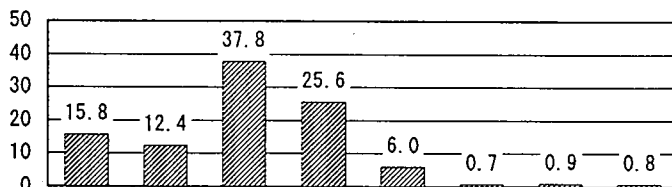
2\_12  
 日本にいるのだから母語を忘れることに余り神経質になる必要はないと思う



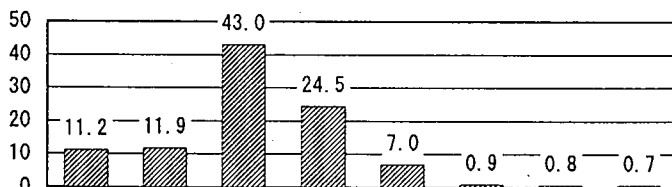
2\_13  
 小学校低学年の場合、子供たちが母語を失わずに日本語ができるようになる必要があると思う



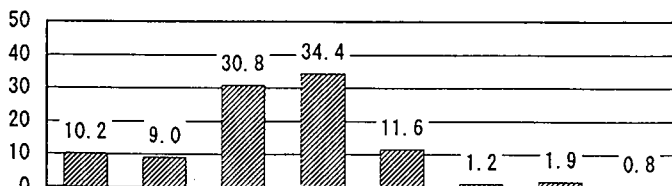
2\_14  
 高学年以上の場合、子供たちが母語を失わずに日本語ができるようになる必要があると思う



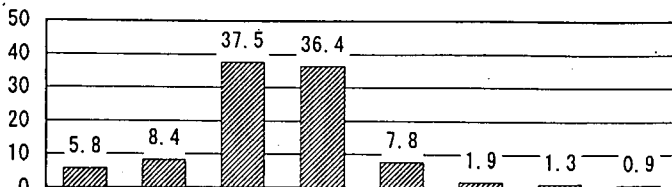
2\_15  
 親が日本語ができるようになれば子供の学習全般もうまく行くと思う



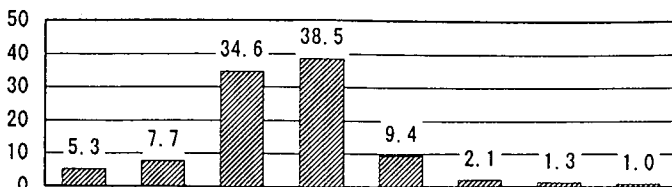
2\_16  
 日本語ができるようになって同じ母語の子供と疎遠になるのは問題があると思う



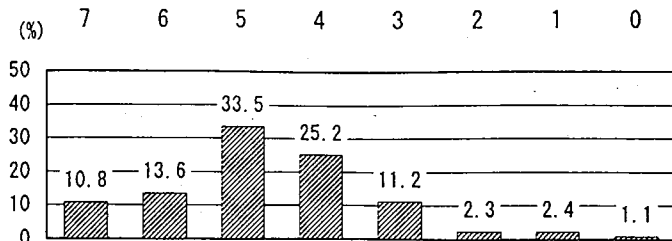
2\_17  
 小学校低学年の場合、母語が一定の水準に達しないうちに日本語を学習しても特に問題はないと思う



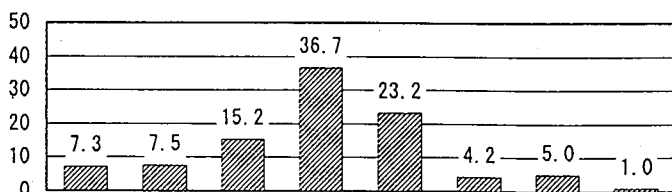
2\_18  
 高学年以上の場合、母語が一定の水準に達しないうちに日本語を学習しても特に問題はないと思う



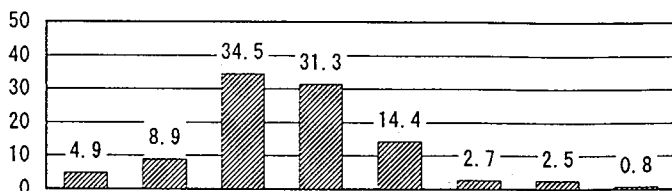
2\_19  
日本語の日常会話が不自由なくなってから授業を十分理解したり読み書きが不自由なくできるようになるまでに1,2年かかると思う



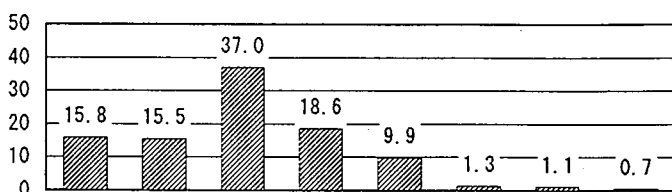
2\_20  
日本語の日常会話が不自由なくなってから授業を十分理解したり読み書きが不自由なくできるようになるまでに5年以上かかると思う



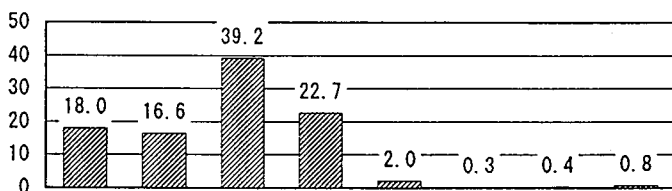
2\_21  
日本語をできるだけ使うことによって日本語能力が高くなれば自然と学習の問題も解消されていくと思う



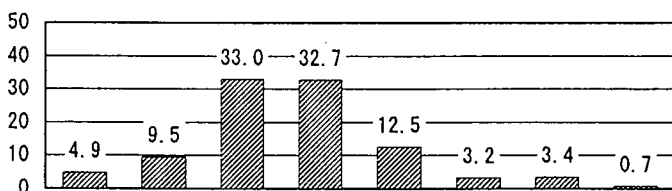
2\_22  
日常会話に必要な日本語の能力と、授業についていくのに必要な日本語の能力は異なると思う



2\_23  
周囲の人が母国や母語の価値を認める態度をとると、教科学習にも好影響を与えると思う



2\_24  
子供の日本語がうまくなれば、子供の抱える心理的問題は解消すると思う



■ 「児童生徒に対する日本語教育のカリキュラムに関する国際的研究」研究チーム

岡崎 敏雄	筑波大学文芸・言語学系
小野 博	大学入試センター
杉田 洋	東京学芸大学海外子女教育センター
中島 和子	トロント大学
林部 英雄	横浜国立大学教育学部
半田 淳子	東京学芸大学言語文学第一学科
箕浦 康子	東京大学教育学部
石井 恵理子	国立国語研究所日本語教育センター
西原 鈴子	国立国語研究所日本語教育センター

■ 調査委託機関

株式会社 社会工学研究所  
酒井 均  
常見 佳代

■ 編集協力

鈴木 理子

児童生徒に対する日本語教育のカリキュラムに関する国際的研究  
平成7年度調査研究中間報告  
《教師の日本語教育に対する意識調査》

発行 平成9年9月30日  
国立国語研究所日本語教育センター  
日本語教育指導普及部

印刷